# 神よぶ姫と婚約者

香柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神よぶ姫と婚約者

【Ｎコード】
Ｎ６２４６Ｚ

【作者名】
香柳

【あらすじ】
君主の晃（こう）は、狩りで奇妙な娘を手に入れる。
彼女の正体は、隣国の姫であり、かつ晃の婚約者である璃玉（りぎょく）。
璃玉は晃に、とあることで助けを求めるが……。

# 1

晃(こう)はその日、思いがけない獲物を捕らえた。
猟師のような毛皮をまとった、１６・７歳の娘。痩せて顔色は青ざめ、髪は何ヶ月も櫛けずらずにいたようである。
少なくとも、この国の民ではなかろう。ここが君主の猟場だと、知らぬはずがないからだ。
「おまえは鐘(しょう)の民だな？　ここは国君の猟場で、民の立ち入りは禁じられている。見逃してやるから、即刻ここを去るがいい」
鐘とは、この猟場の森林を境に隣接する国である。
君主の鐘公が非道で愚劣なために国が乱れており、食いつめた難民がよくこちら側に逃げこんできていた。
そういった民の一人だろう娘を哀れに思い、晃は見逃してやろうとしたのだが。
どういうわけか、娘はその場に踏みとどまり、晃にまっすぐな眼差しを送ってよこした。
よくよく見ると、彼女の顔には知性と、凛とした気概がみなぎっている。
晃はなぜだか心惹かれるものを覚えて、彼女の顔から目が離せなくなった。
「私は……獲物を追ってここまで来たのです。もともとは鐘国内にいた獲物なのだから、捕らえるまで見逃してはもらえないでしょうか？　圭公(けいこう)どの」
その返答で、晃は娘が只者ではないと悟った。
晃は即位間もない君主であり、他国人で彼の顔を知る者は少ないはず。しかも彼は今、下級武官のように簡素な装いなのだから。
晃をこの圭の国君と見抜いた彼女は、いったい何者だろう。
馬を降り、晃は彼女に近づいた。至近距離で見つめると、彼女はひどく小柄で、長身の晃の胸あたりまでしかない。

「……君は何者だ？　なぜ私の顔を知っている？」
その問いに、彼女はなぜか落胆の表情を浮かべた。
「気づいていただけないとは、思ってましたが」
晃は公族の世継ぎに生まれたゆえ、一度見た顔を記憶するすべに長けている。それに並みよりずっと聡い頭脳をもち、かつ物忘れするほど老いてもいない。
なのに目の前の娘は、まるで顔見知りのはずの相手に忘れ去られたかのような、しょんぼりとした様子なのだ。
「私たちは以前に会ったことがあるのだろうか？」　はたして娘は、うなずいた。続けて、いかにも傷ついた様子で言う。
「四年前、あなた様がまだ太子でおられた頃に、鐘の宮中でお目にかかりました。……あなたの婚約者として」
晃はぎょっとした。
奇妙なつぎはぎの毛皮をまとい、ざんばらな髪をしたこの娘が、鐘国の姫だと？
たしかに晃は、親の定めにより鐘国の姫と婚約関係にある。四年前、彼女に会ったというのも正しい。
だがその姫――名はたしか璃玉（りぎょく）という――は、美しくはあるが生気のない、人形めいた娘だったはず。目の前の娘とは、まるで真逆な様子だった。
「あれから色々とあったのです、圭公どの。私一人では、どうにもならないことが。……実は私は、あなたに助けていただきたくて、こちらへ参りました。ある獲物のことなのですが……」
すべてを賭けたような必死の形相で、彼女が言う。
晃は心を揺さぶられた。彼女が本物の姫かどうか、そしてその魂胆は何か。それは後にいくらでも確かめられる。今はとにかく、彼女を見捨ててはおけない気持ちだった。
「国境を越えてまで追ってくるからには、さぞや素晴らしい獲物なのだろう。ぜひその話を、聞かせていただきたい。我が宮殿へ、貴女をお連れすしよう」

すると彼女の緊張した面もちが緩み、きらきらした大きな瞳で晃をしばし見つめた。
晃はどきりとしたが、その動揺を無視し、彼女の腰に両手をあてた。
すると今度は彼女の方が、驚き身をよじる。
「……貴女を騎馬でお連れする」
説明すると彼女が大人しくなったので、軽々と鞍に乗せた。つづいて晃も、その背後に乗る。
軽く抱き寄せると、彼女が恥ずかしげに身をよじった。
（……こんな野猿みたいな娘に、なぜ）
そう思いながらも晃は、不思議な気持ちの高揚を覚えつつ、彼女をともない宮殿への帰途をたどったのだった。

## 2

つれ帰った璃玉をみがきたてるや、とたんに輝きはじめた。
結い上げた髪はつややかな栗色で、紅玉の飾りがよく映えている。
衣装は、金糸の刺繍で縁どられた薄手の上衣に紅色の裳（スカート）を合わせ、真珠飾りのついた帯を下げている。
化粧はほとんどしていないが、透き通るような肌も珊瑚のような唇も、そのままで充分に美しい。
「ああ、とてもよく似合ってる。神女が舞い降りたみたいだ」
まんざら世辞でもなく、晃はつぶやいた。
「……本当にそう思いますか？」
璃玉に真剣な様子で尋ねられ、晃は驚いた。
彼女がまるで、生まれて初めて容姿を誉められたかのような反応をしたからだ。「いつも父上に、みっともない化け物だと叱られておりましたから。でもこうして鏡をみると、美しくはなくても、皆と同じくらいには……少なくとも人間には、見えると思うのです。あなたが本気で誉めて下さったなら、父上が間違っていたと確信できると思って、お尋ねしました」
晃は驚き呆れ、そして憤った。
たとえ美しくなくとも、親は子を可愛いと誉めるものだ。ましてやこんなに愛らしい姫を、化け物とののしるとは。
彼女の父は、君主としてのみならず親としても失格のようだ。
そもそも彼女が薄汚れた奇妙な格好で、たった一人、獲物を追っていたというのも。その父が原因に違いあるまい。
（父親にうとまれて追い出されたか？　だがもしそうなら、鐘公から璃玉の婚約者である私に、何らかの知らせがあってしかるべきだが）
晃の国は彼女の国よりもはるかに強大で、諸国のつどう会盟の折りにも、席次は栄えある二番手である。

よって璃玉の父がこの政略結婚を破談にするはずもないし、璃玉が駄目ならほかの姫をあてがおうとするだろう。
腑に落ちないことばかりだ。だが内心いぶかりながらも、晃は彼女に、茶化すことなく真剣な告げた。
「貴女は普通どころか、とてもお綺麗だ。私は諸国の美姫たちを目にしているが、彼女たちと比べても、遜色ないほどの美人だと思う」
しばらく彼女は晃の言葉を、心の中で反芻していたようだったが。
やがてふわりと無邪気な笑顔を浮かべた。
一瞬、晃はみとれて声を失った。彼のまわりの女たちからは、とうに失われた無垢な愛らしさに、胸がつまる思いだったからだ。
「……では鐘国の名花を、わが国の卿大夫(きそく)らに紹介するとしよう。そろそろ皆、宴席に集っているはずだ」
晃が手を差し出すと、彼女はおずおずと自分の手を重ねた。
彼女は祖国でこそ邪険に扱われていたかもしれないが、ここでは違う。璃玉は晃の正妃となる姫なのだから、公式の宴で、華々しく紹介されねばならないのだ。　もとよりこの婚約は、鐘国の聖なる宝である神獣器(しんじゅうき)を持参金がわりにつけるとの条件で、晃の父が結んだものである。
だが今の晃は、持参金のことなど無関係に、彼女との婚約を確かなものにしたいと思っていた。
理由の六割方は、璃玉への同情と彼女の父への憤りである。
だが残りの四割は……彼自身にすら、いまだはっきりと分からない感情だった。
（この姫は謎めいてるからな。だからきっと、気になるんだろう）
晃は無理やり、そう自分に言い聞かせた。

## 3

「圭公どの――アレがここに来てます」
華やかな宴の席上。璃玉は上座の晃のかたわらにて、舞いや曲芸の催しを楽しんでいたようだったが。
ふいに晃の袖をつかみ、緊張した面もちで急を告げた。
「刺客か？　どこに――」
「違います！　私が追ってきた獲物です。　アレが壇上の神獣器（しんじゅうき）を狙って……」
その時、黒い影が背後の屏風の陰からぬっと、姿をあらわした。赤い瞳がまがまがしい光を放ち、黒い毛皮におおわれた巨体は、まるで熊のようだ。
晃はとっさに璃玉を背後にかばい、かたわらの鉄の燭台を武器がわりにかまえたが。
室内の灯明かりが一斉に消え、辺りは闇に包まれた。「化け物が現れたぞっ！　圭公をお守りしろ――！」
衛士たちの怒鳴り声に、宴の客らの恐慌をきたした悲鳴がかぶさる。
「アレは神獣器を狙ってます――なんとかしないと！」
璃玉が必死な声音で晃に訴える。
「あれは何だ？　普通の武器で倒せるか？」
晃はあくまで冷静だった。これまでも戦場や外交の場で、危ういやりとりを重ねてきただけに、こういう事態への慣れはある。
ただそんな彼も、化け物相手の戦いは初めてだったが。
「あれは――わが国の神獣器に封じられていた悪神です。悪神は他の悪神を食らうんです。だから……」　神獣器。
それはかつて人間を苦しめた、悪しき神々を封じこめた青銅器であり、どの国にも一つ二つはあるものだ。
今は魔除けの宝物として、諸国の宮中でまつられている。

晃の宮殿にもいくつかあるが、宴の際はその一つを壇上にまつり酒を捧げる習わしだった。
よって今もこの室内に、神獣器がある。
それに封じられている悪神を、璃玉の追ってきたという悪神が食らおうとしてるのだという。
謎の多い話だが、璃玉に問いつめてる時ではない。
晃は暗闇の中、手探りで、近くに隠していた剣をとり出した。
圭国の宝剣には、破邪の力があるはずだ。
「……どうか、私を盾に。私が追い込んだせいで、アレはここへ来てしまったんですから」
申し出た璃玉に、晃はささやいた。
「婚約者を盾にするほど、落ちぶれてはいない」
袖にすがる彼女の手が、動揺したように震えた。
その時。
ぎゃっ、という複数の悲鳴とともに、神壇が倒れる音が響いた。
「――神獣器を！」
晃はとっさに、抜き身の宝剣を手に、神壇へと駆けよった。
獰猛な化け物が、神壇を守る衛士たちに襲いかかっている。
おりしも兵士の一人が、手燭に火をつけるのに成功した。
ぼんやり浮かぶ黒い影が、衛士を引き裂いている。
怒りにつき動かされながら、晃はそのかぼそい明かりをたよりに、化け物に斬りつけた。
手応えがあり、熊と虎を合わせたような悲鳴がとどろく。
「……あぶないっ！」
そばにいた璃玉の悲鳴と共に、化け物の鋭い爪が襲ってくる。
まといつく宴の正装のせいで、晃はそれをかわしそこねた。しかし。
化け物の攻撃を、かわりに璃玉が受け止めていた。
「――璃玉っ！」
しかし動揺をおさえ、晃は近づいてきた化け物の目を、宝剣で刺

し貫いた。
おぞましい咆哮と共に、化け物が去る気配がした。なんとか悪神を撃退できたらしい。
だが、璃玉は。
気を失った彼女を、腕の中に抱きとめた晃は、その流れる血の量の多さにぞっとした。

## 4

ひき裂かれた肩が、じくじくと痛い。それに体中が凍え、震えが止まらない。どうしてこんなことに、なってしまったのだろう。

ただ彼に会いたかっただけなのに。

「そんなに痛むのか？　薬が効いてないのか……あの藪医師め」

いらだったような声音が、かたわらから聞こえてくる。これは彼の声だ。璃玉がずっと恋焦がれていた、婚約者の。

（そんなに心配しないで……私は大丈夫だから。悪神に傷つけられるのは、これが初めてじゃないもの）

そう告げたかったが、高熱で舌がうまく動かせない。もれ出てくるのは、苦痛の吐息だけだった。

「いま湿布を替えてやるから。それで少しは楽になるだろう」

彼の言葉にぎょっとなったが、制止するすべもなく、璃玉はなすがままに寝衣をはだけられてしまった。貧相な体を見られたくなかったのに。

彼が一瞬、ぎょっとしたように手をとめたが。すぐに湿布薬を塗布し、包帯を巻きなおしてくれた。

「……すまない。でも君は私の、妻となる女性だから。気に病むことはない」

その言葉で、璃玉は彼が璃玉の背中の古傷に、気づいてしまったのだと知った。ますます羞恥心がこみあげてきて、璃玉はこのまま死んでしまいたくなった。

背中の傷。それは父にうとまれ続けた彼女が、折檻されてできた傷である。とげのある鞭で、父はよく璃玉を罰していたのだった。

璃玉は末の姫である。鐘国では末姫は、君主の家を守る巫女となるさだめだった。しかし彼女はいくつになっても、巫女としての頭角をあらわさなかったのである。

それどころか、五年前のあの日。彼女は神獣器の悪神に呼びかけ

て目覚めさせるという巫術を、初めて成功させたのだが。呼び出された悪神が、太子や他の姫たちを、とり殺してしまったのだ。
父は激怒した。たった一人残された我が子が、できそこないの末の姫だけというのも、父の怒りに火を注いだ。
しかし鐘国は小国で、政略結婚で同盟を結ばねば、すぐに滅ぼされかねない運命にある。そこで父はやむなく、隣の大国である圭の太子と璃玉との、婚約を結ばせたのだった。この不釣合いな婚約を成立させるために、あの璃玉が呼び出した悪神の封じられた、神獣器を贈ることとなったのだった。
そして四年前。初めて会った圭の太子は、凛々しい美貌と鋭い才知をもち、武芸にも秀でた優れた人だった。そして何より璃玉に優しかった。父にうとまれ、母にすら忌み嫌われ、後宮で居所のなかった璃玉に、彼だけが優しくしてくれたのだ。
彼女は婚約者にすぐに夢中になり、はやく彼の妃になりたいと願ったが。折悪しく圭の君主とその妃が不慮の病で亡くなり、彼は六年の喪に服することとなった。
璃玉の父は、圭公が婚約を破棄するつもりだと考えた。六年後には、璃玉は二十歳になってしまう。完全な嫁ぎ遅れの姫になってしまうからだ。そこで父は彼女に、他国へ嫁ぐよう命じたのである。
（でも、それだけは嫌だった……どうしても、この人の妻になりたかったから。でもそのせいで、この人にこんな迷惑をかけてしまったんだわ）
璃玉は自責の念に襲われた。
少し前、強制的に他国の君主のもとへ送られそうになった璃玉は、ある決断を下したのだ。
悪神を目覚めさせ、宮中でちょっとした騒ぎを起こし、その隙に逃げ出して圭公のもとへ行こう、と。
もちろん、悪神を暴れさせて、誰かを傷つけるつもりはなかった。あの痛ましい事件から五年もたっており、璃玉はそれを制御するすべを身につけていたからだ。

途中まではうまくいった。璃玉は、悪神があらわれて混乱状態となった宮殿を脱出し、猟師のような姿に変装して圭との国境に入ったのである。

ところがそこで、たずさえてきた神獣器に悪神を戻そうとしたところ、制御不能に陥り、悪神はそのまま圭国のどこかへ逃げ去ったのだった。

それを追っていたところを、彼に遭遇したというわけである。

（すべて私のせいだわ。この人の開いてくれた宴も、滅茶苦茶になってしまったし。死傷者も大勢出て。……私のせいだ）

璃玉は自分が許せなかった。

枕に顔をおしつけて、むせび泣く彼女を、圭公は誤解したようだった。

「そんなに痛むのか？　……いま眠り薬を持ってこさせよう。それで安らかな眠りにつけるはずだから」

彼が優しく頭をなでてくれている。その優しさに、ますます璃玉は申し訳ない気持ちになった。

安らかな眠りなど、永遠に訪れないような気がした。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6246z/

---

神よぶ姫と婚約者

2011年12月24日07時46分発行